

主要目	
建造所	大阪鉄工所桜島工場
進水年月	1922.1.13
航行区域	近海区域
総トン数	3,605.32トン
長さ	105.30m
幅	13.41m
主機関出力	3,000HP
速力(最大)	13.288ノット

このような悲しい運命をたどったわけですが功績としては、昭和17年10月9日相模湾で機関故障のため漂流中の機帆船「第2準徳丸(42トン)」を救助したこと、また、昭和18年4月6日、豊後水道で機関故障により漂流中の「三船山丸(872トン、三井船舶)」を救助したことです。当時、すでに敵潜水艦は太平洋沿岸に出没、通商破壊を行っていましたがその危険をかえりみず、他船を救助したことは賞賛に値するものであります。

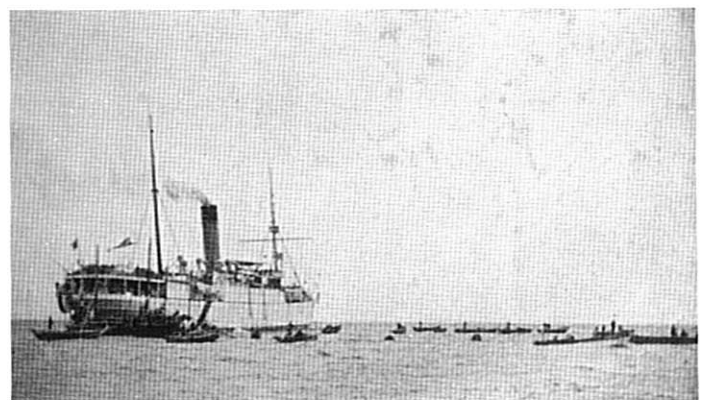
大正8年当時、わが国の領土は樺太から台湾、南洋諸島に至る広大な海域に及び、ケーブル条数208条、総延長6,393哩のケーブルが敷かれ、建設保守は沖繩丸、小笠原丸の2隻で実施していました。

このような状況下で、電信拡張改良計画、深海をまたぐ長距離海底電信ケーブル、平等装荷海底電話ケーブルの研究等、新技術に対応する敷設船として本船が建造されました。

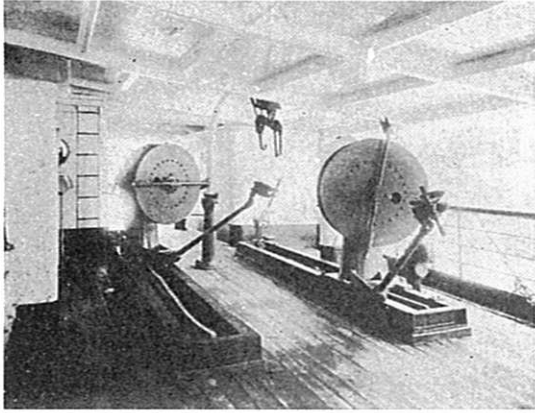
本船の建造費は、151万円の予算で、トートワイヤ装置、スラックレコーディング装置等当時の最新機器を搭載、深海ケーブル約900哩(約1,700km)を積込み、中国大陸、南洋諸島方面に長期行動が可能な敷設船として設計されました。

戦況も思わしくなくなりつつある昭和19年2月20日、午前6時5分、故障修理のため西表島船浮港西方海上を航行中、敵潜水艦の魚雷攻撃を受け約30分後、船尾を高く空中に上げ沈没しました。

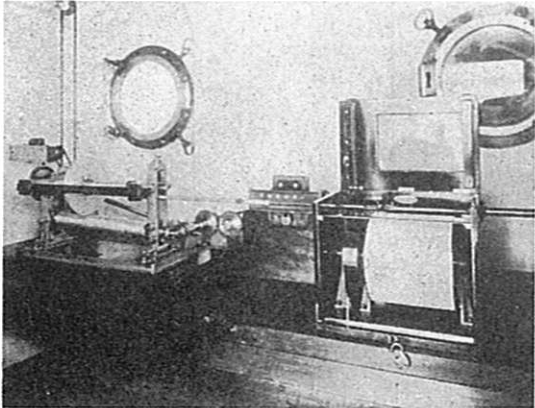
船と運命を共にした者、77名(警戒隊員4名を含む)護衛も援助もない悲しい最後でした。



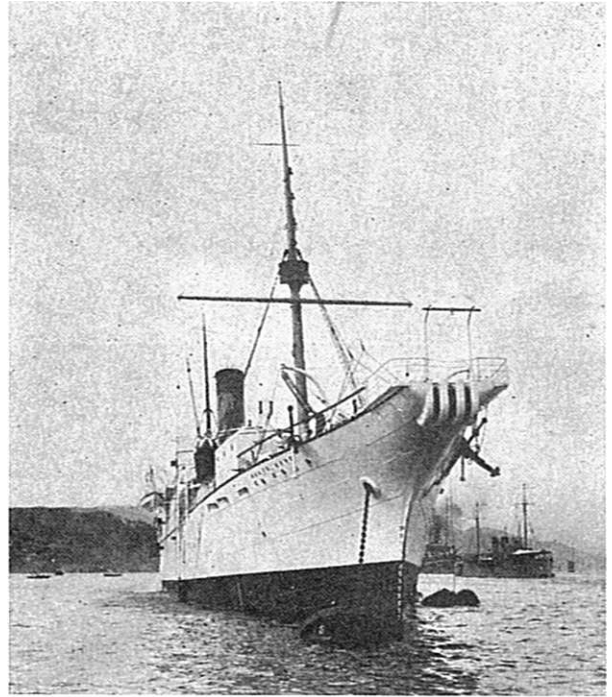
▲昭和12年6月、朝鮮海峡に敷設するケーブルを野北(福岡)へ陸揚作業中の南洋丸



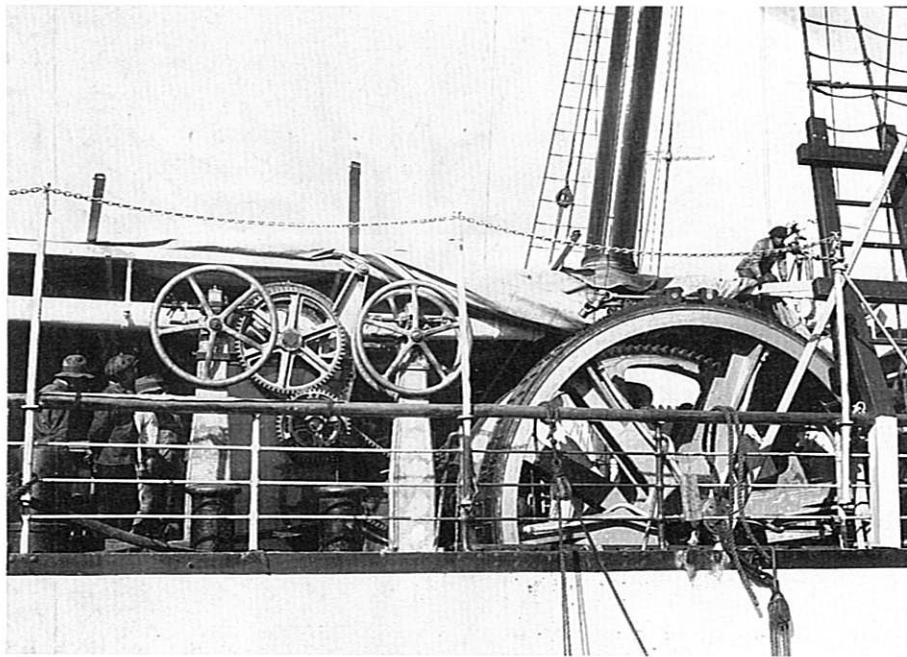
▲トートワイヤー布設機



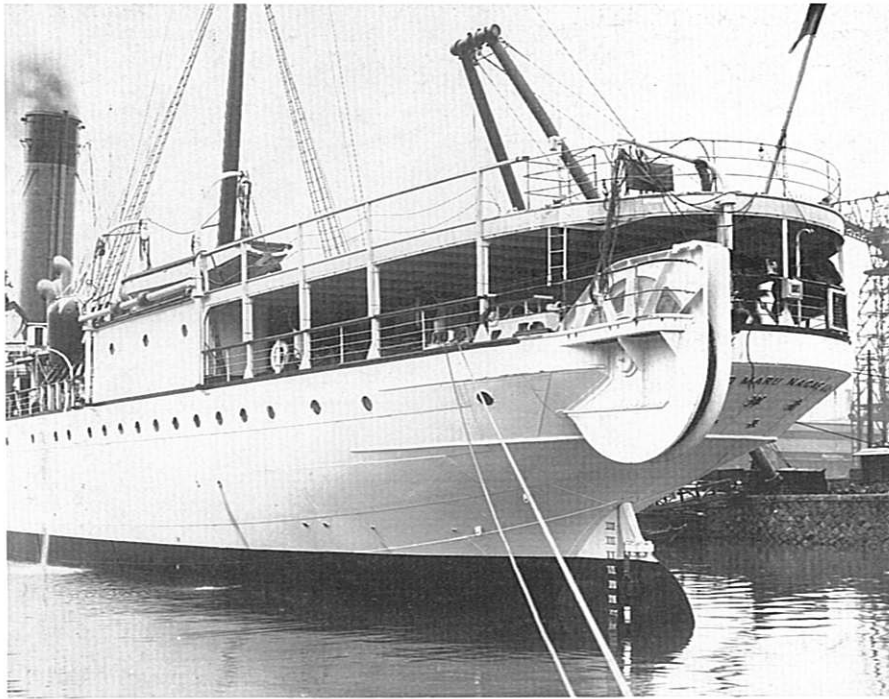
▲スラック・レコーディング装置



▲ブイ係留中、遠景に軍艦が見える。



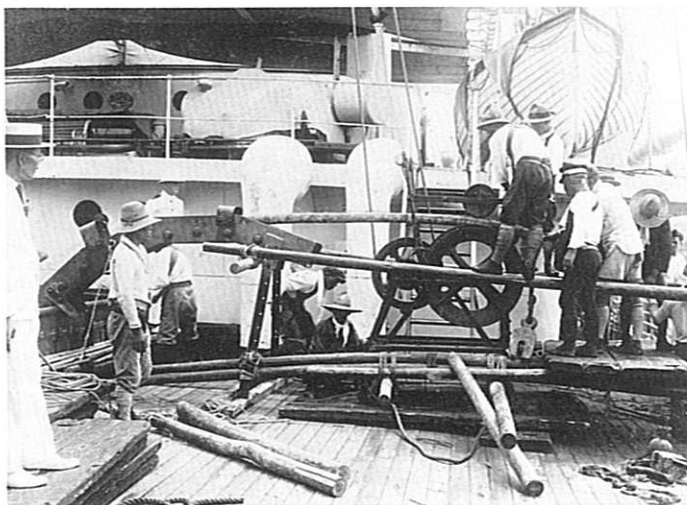
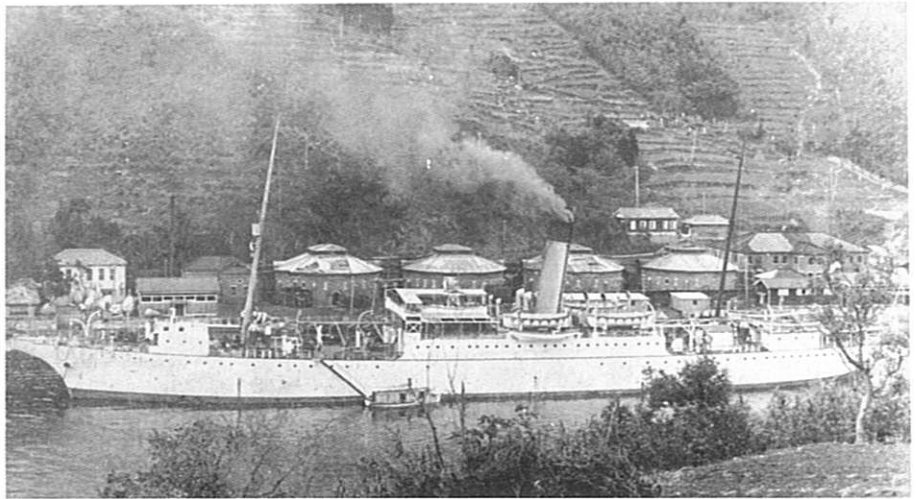
▲左舷船尾に収まった船尾敷設機。  
(ドラム直径3.0m)



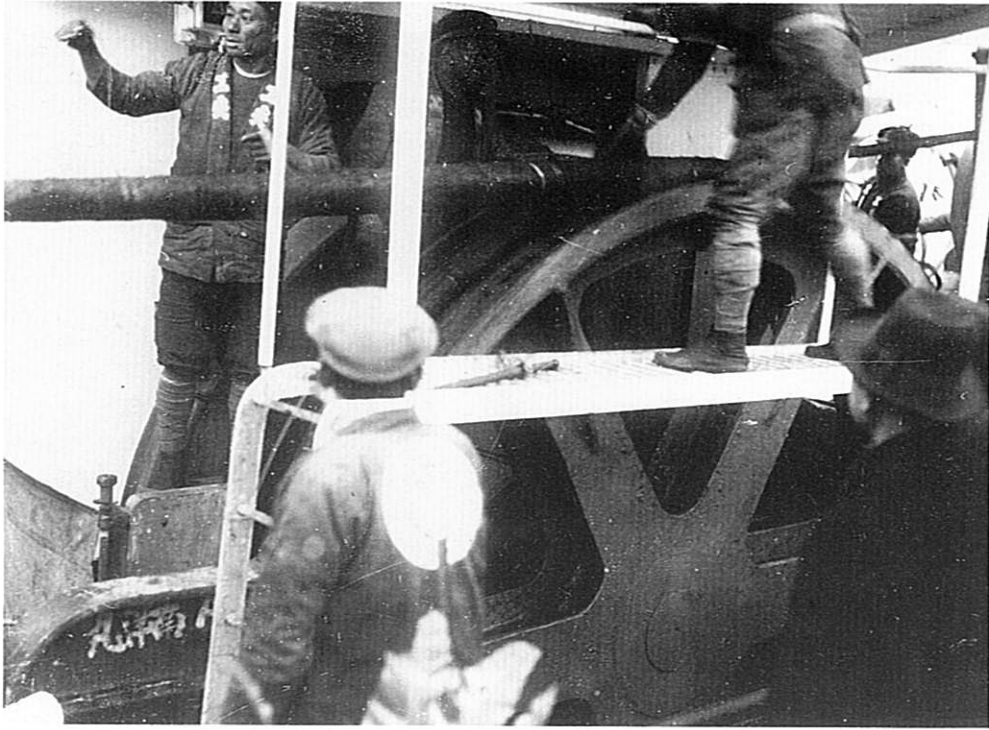
出雲大芦～隠岐太井間(59.3 km)での、4心等装荷鉛被紙電話海底ケーブル敷設工事に先だち、昭和5年1月から同年3月まで、播摩造船所において同ケーブル船尾敷設用のケーブルエンジン及び船尾シーブその他装置を左舷船尾に新設した。

▲新設された左舷船尾シーブ。  
(シーブ直径3.0m)

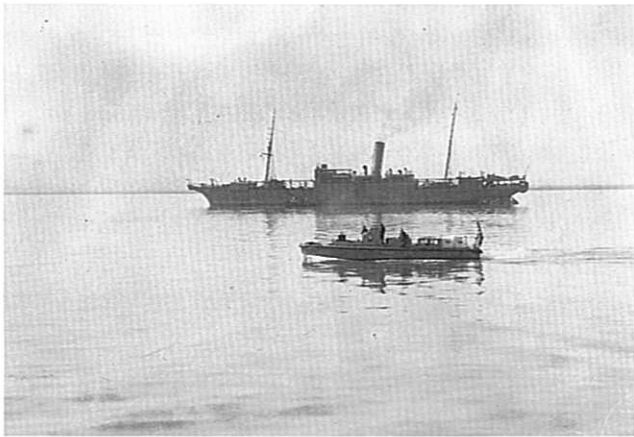
西泊岸壁係留中の南洋丸。背景は旧ケーブルタンク。



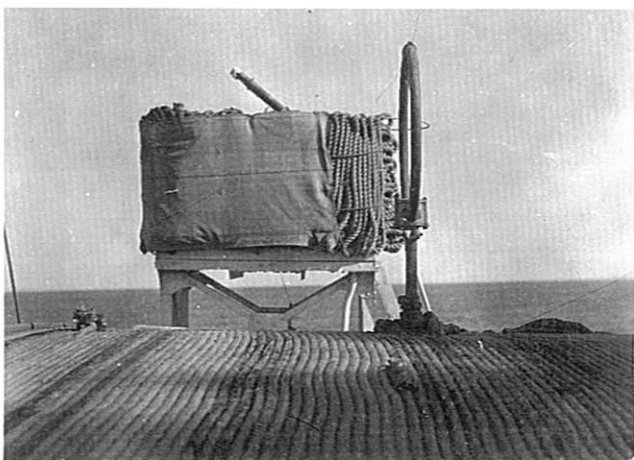
◀ホーリング・マシンでケーブル積込中。(S. 12年)  
(朝鮮海峡用、ケーブル、直径78.2mm、  
空中重量64.71トン/km)



▲船首ドラムエンジン(直径2.0m)、(S.12年)



◀警備艇に守られ黄浦江を敷設中(S.12.9)



▲機銃台



▲船首作業甲板の防護